

風呂小屋の精バンニク

―家の精ドモヴォイとの対比において―

山田 徹也

はじめに

ロシアにおいては現在もなお超自然的存在の实在が信じられ、「語り」を生み出す力が失われていない。「バーニャ Баня」と呼ばれるロシア式蒸風呂小屋には、風呂小屋に現れるモノという意味の「バンニク Банник」と呼ばれる超自然的存在が、棲むと語られる。

こうした超自然的存在が現われるとされるのは何も風呂小屋だけではない。ロシア・フォークロア研究において怪異譚はブイリーチカあるいはブイヴァーリシチナというジャンル名で呼ばれ、その「語り」には、家の精に限定すれば、風呂小屋の精以外にも母屋に棲み、家畜小屋にも現われると言われる「ドモヴォイ Домовой」、家畜小屋の精でドモヴォイとしばしば同一視される「ドヴォロヴォイ Дворовой」、糸つむぎなど女性の家事を手伝うとされる「キキーモラ кикимора」といった様々な名称

が見受けられる。中でもドモヴォイは、農家において中心的な位置を占める人間が寝起きをする母屋や生産手段として重要な家畜小屋の精として考えられており、家の精の中で最も代表的な形象である。

こうした超自然的存在に関する研究は、主に怪異譚や儀礼などの民俗学的資料によって行われてきた。しかし、怪異譚に見られる家の精の民間信仰は、彼らが棲むとされる建物という具体的なもの、すなわち現実との結びつきが強い。したがってこうした家の精の研究に際しては、住居の構造の変化にも考慮して論ずるべきであろう。

本論では、まず風呂小屋という建築物の成り立ちについて考える。そしてロシアの怪異譚に登場する風呂小屋の精バンニクと家の精の代表的形象であるドモヴォイとを比較することで、バンニクがどのような経緯で他の家の精と異なっており、恐れられる邪悪な存在として語られるようになったのか、その変容について論じる。

一 風呂小屋の儀礼性

ロシア式蒸風呂小屋とは、その名の通り蒸気浴を行う場所である。そこでは炉に積まれた石を熱し、それに水を掛けて蒸気を作る。そしてその蒸気を浴びて汗をかけた後、白樺などの小枝を集めて束にした入浴用の枝箒で体を叩いて垢を落とす。入浴後は水浴や、冬期には雪で体を冷やすこともある。

入浴頻度は地域や季節などによっても異なるが、例えば十九―二十世紀の北ロシアでは、夏に週二―三回、冬は週一回程度入浴していたことが明らかにされている。⁽²⁾ また夏至の祭りである聖ヨハネの祭日のような大きな祭日の前日にも蒸風呂に入った。⁽³⁾

このように日常的に用いられる一方で、風呂小屋は異教的な *поганный* 場所⁽⁴⁾ といわれる。ある怪異譚において、風呂小屋は、次のように語られている。「夜遅くに風呂小屋に行つてはいけないよ。(中略―引用者註) 風呂小屋つてのはね、異教的なんだ。なんてったって聖像画がないからね」⁽⁵⁾

また風呂小屋は、人々に害を与える異教徒の魔術師が後継者にその力を受け継がせる場所として、また魔術師が悪魔を呼び出すための場所の一つとしても知られる。⁽⁶⁾ そして、既に信仰としては消えてしまったロジャニツァ *Рожаница* という異教の神への供物を供える場でもあった。⁽⁷⁾ このロジャニツァに関し

ては資料も乏しく、その実体ははっきりしていないが、豊饒や収穫、出産、運命などに関係する神だったのではないかとされている。⁽⁸⁾

風呂小屋における異教性とは単に非キリスト教的であるというだけではない。異教的であるということは、キリスト教側の人間にとって自分達と敵対し、忌避すべきものであるということでもある。そして異教的な場である風呂小屋の精バンニクは、基本的に人間に対して敵対的で恐怖の対象とされる。

バイブーリンは、このバンニクの人間に対する敵対的なイメージを『東スラヴ人の儀礼と観念における住居』において他の建物との位置関係によって説いた。

近代以降の農村では、基本的に道路の両側に農家の母屋が並び、その奥に穀物小屋、家畜小屋などの作業施設が位置し、風呂小屋は更にその奥に位置している。そして、その背後には森や草原が広がる。

バイブーリンによれば、道路は人間の作ったものであり、人間に属する。そして、通りから離れれば離れる程、森や草原といった人間との関わり合いが薄い場所へと移り変わっていく。そのため通りに近い位置にある母屋の精であるドモヴォイは人間に好意的な存在であると考えられているが、最も離れた場所に建てられる風呂小屋の精バンニクは最も敵対的であるとされているのである。⁽⁹⁾

ただし風呂小屋は、異教的な場所とされ恐れられつつも、生

活に必要不可欠な場所として非常に重要な場所であった。まず衛生、治療の機能である。一七〇九年、オランダの外交官ユストが「ロシアでは全ての病気の最初の医者はロシア式風呂小屋だ」という言葉を残しているように、民間医療において風呂小屋での蒸気浴はなくてはならないものであった。

それは、風呂小屋における治療方法が発展し、様々な方法が編み出されたことから明らかである。例えば病気の予防として蒸気をたてる際には、水に様々な葉草が加えられた。また、炉の灰も病気を癒す効果があるとして加えられることがあった。また、個人による病気の治療だけではなく、専門家による治療を施す場として風呂小屋が用いられることもあった。更に病気の治療の際には呪文も用いられた。⁽¹¹⁾

また風呂小屋は、人生の重要な契機となる結婚、出産、葬礼の儀礼を行う農民の精神的な生活にとって重要な場所でもあった。

風呂小屋の結婚儀礼は、特に北ロシアで特徴的なものとして知られている。花嫁は結婚式の前日に蒸風呂に入る。彼女の女友達たちが花嫁を風呂小屋に連れて行き、そこで彼女らは「乙女の自由を捨てなさい」と言いながら花嫁の三つ編みのお下げを解き、花婿から贈られた入浴用の枝箒で花嫁を叩く。⁽¹²⁾

風呂小屋は出産を行う場でもあった。また、妊婦や生まれた子供は、経済的余裕、時間的余裕があり、許される状況であるならば、出産後、一週間程も風呂小屋に寝泊りすることがあつ

た。その際、バンニクは、子供を獲物にしようと外からやってくる悪霊から赤子を護る存在として考えられもする。⁽¹³⁾

葬礼の儀式においても、風呂小屋が重要な位置を占めていたことがあった。現在では残っていないようであるが、追善供養の日に、亡くなった故人のために蒸風呂を用意したという記録がある。また、死者が入浴後に体を拭くことが出来るようにタオルを小屋に残すこともあったという記録も残っている。⁽¹⁴⁾

またロシア全土で様々な占いが風呂小屋と関係する。代表的なものとしては、未婚の女性が自分の結婚相手に関して行う占いがある。たとえば風呂小屋の炉の石を投げて未来の夫の性格を占うことがある。冬のクリスマス週間に石を氷の穴に投げ入れ、静かに石が沈んでいくと良い夫、水しぶきをあげると乱暴な夫だという。

石以外にも入浴用の枝箒を作る枝が占いに用いられることもある。入浴用の枝箒の枝が聖ヨハネの祭りに集めると良いとされているのは、この日に摘まれた葉草や枝は一年の内で最も高い魔術的な効果を持つと信じられているためである。夜、その日に集めた枝を投げてその根元がどちらに向いているかで、誰に嫁ぐかを占った。⁽¹⁵⁾

また、風呂小屋は、火事等の理由で母屋が失われた際の一時的な仮住まいとして、あるいは旅人の一時的な滞在場所として用いられもした。⁽¹⁶⁾

風呂小屋が異教的であるというのは、キリスト教徒にとって

自分達と敵対し、忌避すべきものであるということである。しかし、この建物は、民間医療や結婚儀礼、出産儀礼、占いなどを行う場として重要な位置を占めてもいる。こうした二面性を解明するには風呂小屋の成り立ちについて検討する必要がある。

二 住居の変遷と風呂小屋

現在、風呂小屋と母屋は別棟に建てられているが、ロシア人の祖先であった東スラヴ人は、元来一つの建物の中で暮らして、蒸気浴も同じ建物の内部で行っていたことが明らかにされている。

『ロシア民話集』の編者であるアフナーシエフには「スラヴ民族の農民の住居における宗教的、言語学的意味」という論文がある。彼の指摘によれば、小屋を意味する言葉「イズバー¹³⁶」は、古くは「イストープカ источник」といい、火を焚くという意味の動詞「イストピーチ истопить」が語源となっている⁽¹⁷⁾。また、このイストープカという語は、単なる住居という意味だけではなく、体を洗うための小屋という意味としても用いられた。これは古くは風呂小屋と住居が分離されていなかったことに由来している⁽¹⁸⁾。

一〇世紀初頭、アラブ人の旅行者のイブン・ルスタはロシアにおいて地面を掘ってつくられた奇妙な建築物を見たとき次のよ

うに書き残している。

「彼らの国では寒さが厳しく、その為に各々が地面に穴蔵のようなものを作っている。その穴蔵にはキリスト教の教会のような切り妻屋根がかけられ、その上が土で覆われている。そうした穴蔵に彼らは薪と石を持って家族全員で入り、炉に火を燃やし、石を赤くなるまで暖める。石が赤くなつて熱くなると、彼らはそこに水を掛け、そこから蒸気が出て、服を脱ぐことが出来る程暖かくなる」⁽¹⁹⁾

考古学者達の調査によれば、東スラヴ人は、一〇世紀まで一般にこのような土小屋に住んでいた。イブン・ルスタの見た住居も含め、それらは住居が地上に建てられるようになる前の最も古い住居であつたと考えられている⁽²⁰⁾。また一〇世紀以降には、地上に住居として丸太小屋が建てられるようになった。新しい住居は母屋として、そして古い住居は蒸気浴の場としてのみ用いられるようになり、次第に母屋と風呂小屋が分離されて建てられるようになった。

こうした住居の構造的変化の始まりとほぼ同時期の九八八年に、キエフ大公ウラジーミルは、キリスト教を国教として定め、その後キリスト教はそれ以前の異教信仰を異端として弾圧するようになっていった。例えば以下は『舵の書』と呼ばれる教会文献の引用である。

「リヤザン版『舵の書』(一二八四年)

……何らかのことを聞き出そうとして(魔術師に近づいたものは―訳者註) 六年間の教会禁足措置を受ける。同様に、熊を連れ歩く者、魔術師、雲を追ひ払う魔術を使う者に近づく者、運命や偶然の辻占を信じるものも教会から遠ざけられる。

解釈 素朴な人々を慰んだり、喜ばせようとするために熊やそのほかの動物を餌付けしたり、飼ったりする者、辻占を信じる者、運命をロジャニツァといって信じる者、魔術を信じる者も同様である。⁽²²⁾」

既に述べたように風呂小屋は、『舵の書』では信仰を禁じられているロジャニツァの信仰の場であり、また、『舵の書』においてその関わり合いが禁止されている魔術師の場所でもあった。一二八四年のこの記述からは、キリスト教が導入されて以降、三百年を経た後においても、ロシア人がキリスト教徒でありながら、それ以前に存在していた異教に対する信仰も忘れず、その狭間でうまくバランスを取っていたことが窺える。

だがキリスト教への移行は、民衆が自ら進んで改宗したわけではなく、権力によって強いられた改宗であった。ロシア史を知るための重要な資料の一つである『原初年代記』ではウラジーミルがキリスト教を国教として選択し、民衆にもキリスト教を

信仰するよう洗礼を強いた場面の記述が見られる。⁽²³⁾こうした状況では異教信仰が根強く残ったのも当然であろう。民衆は、名目上、キリスト教という新しい宗教の信徒となりつつも、それ以前の信仰を捨てなかったのである。

その結果、異教的な風呂小屋と聖像画の飾られるキリスト教的な母屋での住み分けが行われた。例えばロジャニツァ信仰は出産とも関係していると考えられているが、出産する場が風呂小屋へと移ったためにその信仰も風呂小屋で存続された。

また、蒸気浴は民間医療の手法としても用いられていた。ロシアの入浴文化に関する研究書『ロシアの民衆伝統における風呂小屋と暖炉』によると、風呂小屋で用いられたとされる呪文に、「火花の女帝よ *Испина Мокра*」、「火の皇帝よ *Испин Орохъ*」といった呼びかけの文句が見受けられるという。同書では、これらの人格化された火のシンボルは、異教時代において炉の火が信仰の対象であったことに由来するとしている。こうした火への信仰もまた、蒸気浴という民間医療の機能が住居から風呂小屋に移される際に持ち込まれたものである。⁽²⁴⁾

キリスト教の受容後、千年以上が経ち、ロシア人は自らをキリスト教徒として考えるようになった。生活の中心となる母屋にはキリスト教的な生活の場を意味するものとして聖像画が置かれるようになった。しかし、キリスト教は、キリスト教以前の異教信仰を完全には排除出来ず、異教信仰の中心的な場であった風呂小屋には今もって聖像画は置かれない。

ただ風呂小屋と母屋は、同一の起源を持つ建物である。キリスト教受容とはほぼ同時期に分離した二つの建物は、その建物の持つ機能だけではなく、異教とキリスト教という二つの信仰をも分けることとなった。現在、風呂小屋は、蒸気浴という重要な機能を担いつつも、異教的であり、恐ろしい場所という二面性を持つ。これは、風呂小屋が蒸気浴の場であり、かつ異教信仰の中心の場であつたことに由来するのである。⁽²⁵⁾

三 バンニクとドモヴォイ

既に述べたようにバンニクとドモヴォイは、それぞれ風呂小屋と母屋に棲むとされる超自然的存在である。直訳するならば、「風呂小屋に棲むモノ」と「母屋に棲むモノ」という意味になる。彼らはその棲むとされる場所の体现者であり、そのためにその棲むとされる建物の主^{хозяин}とも呼ばれる。

家屋の様々な超自然的存在の中でもバンニクとドモヴォイは、ある意味で対極にある存在といつてもよいだろう。バンニクは、数多くいる家の精の中でも特に人間に対して最も敵対的な存在として恐れられている。そのため、彼は悪魔と変わらぬものとして扱われることも少なくない。

一方、ドモヴォイは、一般的に人間に好意的で、家の護り手として外部からの邪霊などの侵入を防いで住人を護ってくれるとされている。そのため例えば家の引越しの際には、人々はわ

ざわざ自分の家に棲むドモヴォイと一緒に連れていこうとする。その際には特別な儀礼が行われる。⁽²⁶⁾ また、怪異譚集『北ロシアの神話的語りと伝説』の編纂者チェレパノヴァは、北ロシアのドモヴォイに関する信仰を取り上げ、他の不浄な精であれば恐れる聖像画をドモヴォイが怖がらないことから、実質的にはドモヴォイを他の不浄な精と同列に扱うことは出来ないとしている。⁽²⁸⁾ つまり、ドモヴォイは善良な精として認められているのである。

既に述べたように風呂小屋と母屋は、起源を辿れば、同一の建物であつた。またそれゆえにバンニクとドモヴォイもまた共通の起源をもつ。

アフナーシェフの論文「スラヴ民族の農民の住居における宗教的、言語学的意味」では、ドモヴォイの起源の一つとして土小屋の竈の火に対する精霊信仰を挙げ、その信仰が変化した、現在のドモヴォイに対する信仰が生まれたとしている。彼によれば火は人間に災いを持ち込んでくる邪霊などを寄せ付けないものとして信仰されていた。⁽²⁹⁾ 彼の説はそのままバンニクにも適用出来る。前述の通り、風呂小屋の呪文には明らかに火に対する信仰の痕跡が見られる。火の信仰を起源としている点で、バンニクとドモヴォイは同一の存在であつたと考えうる。

それゆえ風呂小屋と母屋に棲むとされるバンニクとドモヴォイの怪異譚には共通する部分も多い。例えば火と関連する直接的な共通点としては彼ら双方が、火のある場所の傍をその棲み

処としている点に受け継がれている。

バンニクは、風呂小屋の炉の下や裏に棲むとされることがある。⁽³⁰⁾ また、ドモヴォイも「ペーチ печь」と呼ばれるロシア式暖炉⁽³¹⁾の下などに棲むといわれ、ペーチの下に棲むモノを意味する「ボドベーチニク пощечник」という異名で呼ばれることもある。つまり、バンニクとドモヴォイの棲むとされる場所として双方共に風呂小屋の炉あるいは母屋の暖炉という火を起こす場所が重要な位置を占める。

外見という点においても、バンニクとドモヴォイは、どちらも男女の姿をとることが出来るとされている。怪異譚においてどのような外見をしていたのか、はっきりと見たと語られることは少なく、ほとんどは声や手で触られたということからの類推である。時に彼らは、背の低い髭を長くのばした老人の姿をしていたと語られる。

一例を挙げる。ただし後述するが、この例では不適切な時間バンニクに質問をしたことによって罰せられたのだと語り手が考えていることが背景にある。

「エレーナのところにいつて、彼女の旦那がどうやって（浴室内の――引用者註）壁に作り付けられたベンチから追い出されたか訊いてみるといい。

雄の子牛が三匹いなくなった。コルホーズでそういうことがあったんだ。おそらく彼もそういうこと（いなくなった家

畜を探し出す方法――原註）を知っていたんだろう。行つて探し出してきたんだ。そのあと彼は風呂小屋にいった。彼が風呂小屋の脱衣所で服を脱いでいると、どうやってその子牛達を探し出したのか、どこでなにをしていたのか彼の奥さんが訊いてきた。彼は話しながら体を洗いに中に入つていった。そしてその後髭が真っ白の老人（バンニク――引用者註）がでてきて、彼は壁に作り付けのベンチから体をつかまれた。彼が引つかまれたと思つた時には、彼は脱衣所までまるで小さな子供のようにとんでつた。老人は『ちゃんとした時間におまえが訊きにこなかったからだ』と怒つた」⁽³²⁾

バンニクは、背の低い長く髭をのばした老人の姿をしていたとされるだけではなく、入浴用の枝箭の葉に覆われ、手と足の代わりに獣のような鋭く長い爪の手をしているとされることもある。⁽³³⁾ こうした鋭く長い爪は、キリスト教の信者たる人間の完全なる敵対者、悪魔の持つ身体的特徴でもあり、こうした手を持つものとしてバンニクが語られるのは、彼が悪魔に似た同種の存在として考えられているためである。

一方、ドモヴォイは、バンニクのような鋭く長い爪をしているとはされないが、亡くなった人間やまだ生きている家族そっくりの姿をしていたとされることがある。⁽³⁴⁾

蛇や猫、犬といった動物が、バンニクの化身とされることもある。ドモヴォイもまた蛇や猫、犬といった動物の姿をとるこ

ともあると考えられている。

引用した怪異譚では、バンニクの望む時間に訊きにいかなかったために、男性は、バンニクに罰せられる。バンニク、ドモヴォイには彼らの定めた規範が存在すると考えられている。人間が規範を守れば、彼らはその人間を守護し、援助する。しかし、規範を破ればこの男性のように罰せられるのである。

また、バンニクは、「風呂小屋に子供を一人にしておいてはいけない。そこにはバンニクが棲んでいて取り替えちゃうんだ。赤ん坊を取り替えられちゃったら、そいつは泣き叫んでばかりで大きくならない。顔の区別もできるほどにも育たないのさ」⁽³⁵⁾と言われ、連れ去るともされる。そのため赤ん坊や妊婦を風呂小屋に一人で置き去りにしてはいけないと考えられていた。

バンニクが「取り替え子」を行う理由としては、子供がまだ洗礼を受けていない状態だからだと考えられている。⁽³⁶⁾また、若者がバンニクに攫われた娘を見つけて自分の嫁にするとという怪異譚も採録されている。⁽³⁷⁾

ドモヴォイもまた子供を攫うとされることがある。怪異譚としては、母親が娘におまえなどどこかに行ってしまうと言うと、本当にドモヴォイに攫われてしまったという話が残されている。あるいはバンニクの場合と同様に攫われた娘を見つけて結婚するといった怪異譚も採録されている。⁽³⁸⁾

既に述べたように風呂小屋で占いが行われることがある。例えば風呂小屋の扉を閉め、机にテーブルクロスを掛け、食器を

二組置く。窓を左肩越しに見て呼ぶ。そうするとバンニクが出てくるか、何かの兆しをあらわすという。ただしその際ナイフを置いてはいけない。バンニクに切られるからである。⁽³⁹⁾またこうした食器などを使った同様の占いが母屋の中でも行われていた。その際現れるのはバンニクではなく、当然ドモヴォイである。⁽⁴⁰⁾これらの占いにおいてバンニクとドモヴォイは、共に、人間に未来を教えるという重要な役割を担っている。

上記の占いは、占いというよりもバンニクやドモヴォイに尋ね、そしてその答えをもらうという形式をとっている。例えば外見の例として挙げた怪異譚では、男性は行方不明となった子牛のいる場所をバンニクに尋ねたからこそ見つけることが出来たのだと話者が考えていることが背景としてある。この男性の行為もまた一種の占いだと考えられよう。

また、次のような占い方法もある。バンニクに向かって占いの文句を唱えながら風呂小屋の窓や煙突に手を入れる。するとバンニクが娘の手に触れるという。そのときバンニクの手が毛むくじらであれば幸せになり、すべすべしていれば不幸になるという。

ドモヴォイもまたバンニクと同様の毛むくじらの手、あるいは毛のない手をしているとされる。そして彼の手もまた吉凶を判断する根拠となる。

異教的存在としてドモヴォイとバンニクなどの超自然的存在は、真夜中に行動すると考えられている。夜寝ている際、何者

かにのしかかられ、息が苦しくなることがある。日本では「金縛り」と呼ばれている現象である。ロシアにおいて、金縛りは、主にドモヴォイの行為とされ、「絞める *завить*」などと表現される。ドモヴォイの通り道だと考えられている場所に寝てしまったために、彼の怒りに触れたとされる。あるいは金縛りにかかった時に「吉か凶か」と尋ねると、未来の吉凶を答えてくれることもあるという。また前述のようにドモヴォイの手の感触が毛むくじやらかどうかで吉凶がわかるともされる。こうした怪異譚においてドモヴォイからの答えは凶であることが多い。そして、ドモヴォイの予言通り、実際に不幸な出来事が起きるのである。⁽⁴¹⁾

バンニクもまた夜に行動する。そのためキリスト教徒であるロシア人達は真夜中になる前に体を洗い終えようとし、夜中に風呂小屋に行くのを恐れる。もし禁忌を破り、真夜中以降に風呂小屋で入浴すると、バンニクは、長く鋭い爪で引つ掻いたり、皮を剥いだりして、人間を不具にしたり、命を取ることさえあるとされている。また、ドモヴォイと同様の金縛りをバンニクが行うとされることもある。⁽⁴²⁾

バンニクとドモヴォイは、異なった存在として認識されている。ドモヴォイは、聖像画などのキリスト教の信仰と結びついている母屋を具現化した存在であり、他の不浄な精であれば恐れの対象である聖像画を怖がらないとされる。一方、風呂小屋には聖像画はなく、逆に聖像画や十字架を持つて入るとバンニ

クを怒らせるというので外さなければならない。また全く逆に、バンニクを悪魔と同類として考え、襲われないように十字架を必ず携帯しなければならないと考える地域もある。⁽⁴³⁾

これら二つの超自然的存在には驚く程共通点が多い。占いの場として風呂小屋が用いられ、そこで予言するのはバンニクである。ドモヴォイもまた吉か凶かという問いに答える。どちらの存在も未来を予言するとされる。それ以外に風呂小屋の炉や母屋の暖炉の裏や下といった場所に棲むといった共通点や、共に老人の姿や蛇や猫といった動物の姿をとるといった点、子供を攫うといったこと、そして毛むくじやらの手をしていけば吉、毛のない手をしていけば凶という考えも共通している。

行動原理にも共通点が見られる。怪異譚ではバンニクやドモヴォイは、彼らの規範を護る者は守護するが、その規範を無視する者は罰する。バンニクは敵対的な存在であるとされるが、ドモヴォイと同じく援助者として見ることも出来るのである。

ロシアの民俗学者であり、特に怪異譚の研究を専門とするクリニチナヤも『ロシアの民衆神話』において、全てではないが、本論で取り上げた共通点の内、幾つかを取り上げ、その理由を元々風呂小屋と母屋が同一の建物であったためであると論じている。⁽⁴⁴⁾

ただし、彼らの共通点は、それぞれの持つイメージによって異なる解釈をされる。このことを明らかにする例として次のようなバンニクの怪異譚が挙げられよう。

「ばあさんが話してたもんさ。オヴィンニク（穀物乾燥小屋の精―引用者註）は助けてくれるが、バンニクは絞め殺すんだってね。」

ナザリハが夜に体を洗いにいったんだけど、朝、彼女は熱くなった石の炉に投げ捨てられるような格好でいるのが見つかったんだ。彼女は風呂小屋の中の石の炉の上で死んでたのさ⁽⁴⁵⁾」

この怪異譚において語り手は、本来行つてはならないとされる夜に風呂小屋で入浴しようとしたために、その罰としてナザリハが絞め殺されたとしている。この「絞める」という語は、先に述べたドモヴォイが金縛りをかけたと言られる際にも用いられるものと同じ言葉である。

しかしドモヴォイによる金縛りの怪異譚では、彼の怒りに触れても殺されることはなく、そして予言通りに生じた不幸な出来事自体はドモヴォイの怒りがその理由であるとはされない。仮にドモヴォイの予言後、人が死んだとしても、それはドモヴォイの行為の結果ではない。これはドモヴォイが人間を護るものだという考えが根底にあるからである。つまり、ドモヴォイによる金縛りは罰というよりも警告という意味合いが強い。

バンニクによる金縛りは、異教的存在であるバンニクによる罰であるからこそ、人間の殺害にまでいたるが、ドモヴォイに

よる金縛りは警告であり、殺害されることはないのである。

また、バンニクとドモヴォイは共に老人の姿をしているとされることがあるが、バンニクは、ドモヴォイと異なり、ただ老人の姿をしているだけではなく、獣のような長い爪をしているともされる。こうした悪魔的特徴は、よりバンニクの異教的なイメージに合うようにバンニクが人々によって捉えなおされた姿なのである。

このように怪異譚において、バンニクとドモヴォイの共通点は、その結果や細部が異なつたものとして語られうる。それはドモヴォイが人間に対し好意的な存在と考えられているのに対し、バンニクが人間に敵対的な存在であるとされているためである。特にバンニクの怪異譚では、彼が恐ろしい存在であるといったイメージが常につきまとい、語りの内容を規定している。怪異譚では、ドモヴォイとの共通点がいかにあろうとも、バンニクが基本的には敵対的だという範囲を逸脱しないのである。

結論

バンニクの棲むとされる風呂小屋は、キリスト教受容以前、存在せず、その機能は母屋の機能と共にひとつの建物にまとめられていた。そしてその後、建築技術の向上により、住居は地上に建てられるようになり、風呂小屋も別に建てられるようになった。

風呂小屋と母屋が別の建物として建てられるようになり始めた時期と重なるようにキリスト教が受容された。そして母屋が農民生活におけるキリスト教の中心へと移っていくにつれ、異教信仰の中心の場としては風呂小屋という建物が残ったのである。

このとき敷地の離れた場所に風呂小屋があったからこそ、異教の受け皿として考えられたのか、異教の受け皿であったからこそ、離れた場所に建てられたのかについてはまだ研究の余地がある。ただし、「異教的な」という言葉を使って語られるほど風呂小屋には非キリスト教的なイメージがあるのは確かである。

また、キリスト教化が進むと、異教は邪教として考えられるようになった。そして異教信仰の中心であった風呂小屋の精であるバンニクもまた、人間に対して敵対的なものとして考えられるようになっていったのである。

現代において、風呂小屋は、恐るべき場であるとされつつも、入浴、あるいは儀礼、民間医療の場として活用されている。こうした様々な儀礼や民間医療などは外来のキリスト教にはなかったものであり、異教的なものである。しかし、それらは人々にとって必要不可欠なものであり、有益なものであったからこそ残された。そしてそれゆえに風呂小屋の体現者であるバンニクは根本的には人に敵対的であるとされ、怪異譚においても彼が敵対的だという範囲を逸脱しないものの、人を助けることも

ある存在としても語られるのである。

以上のようにこうしたバンニクの性格付けは、バイブリーンのような風呂小屋の位置を単純に反映しているだけのものではない。バンニクのイメージは強固な異教信仰とキリスト教の狭間に生きてきたロシアの民衆の認識、それを決定する家屋という現実の変化により歴史的に形成されてきたものでもある。

註

- (1) ジャンルに関しては、塚崎今日子「ブイリーチカ再考」『ロシア文化研究』第四号 一九九七年 八九—九八頁に詳しい。
- (2) 風呂小屋は以前から全ロシア中に普及していたわけではなく、南ロシアでは二〇世紀に入ってから普及し始め、そのためバンニク信仰が存在していないとされる地域もある。そのため本論では北ロシアをその主な論考の対象としている。
- (3) Липинская В. А. (Отв. ред.) Бани и печь в русской народной традиции. М.: Intitad, 2004. С. 162.
- (4) 異教とはキリスト教普及以前にロシアに存在していたとされる精霊信仰のことを指す。
- (5) Черепанова О. А. Мифологические рассказы и легенды русского Севера. СПб., 1996. №196.

- (6) Липинская. Бана и печь. С.200.
- (7) Миронобов Ю. Русская мифология: Очерки и материалы. München, 1982, С.55.
- (8) Власова М. Русские сужерия. СПб.: Азбука-классика. 2001. С.445. ロンヤニミツマはロンブツの神の名称の常として先頭の文字は大文字で書かれる。
- (9) Байбурин А.К. Жилище в обрядах и представлениях восточных славян. (2-ое изд.) М.: Языки славянской культуры, 2005. С.45-47. (1983年初出)
- (10) Юст Ю. Бана, лечение и обычаи // Русский быт по воспоминаниям современников. XVIII век. М., 1914. Ч.1. С.86.
- (11) Липинская. Бана и печь. С.157-159.
- (12) Багашов Д.М., Марченко Ю.И., Калмыкова Н.И. Русская свадьба. М.: Современник, 1985. С.105-106.
- (13) Будовская Е.Э. Банник. // Славянские древности. Т.1. М.: Международное отношение, 1995. С.137-138.
- (14) Бломквичт Е.Э. Крестьянские постройки русских, украинцев и белорусов // Восточнославянский этнографический сборник. М., 1991. С.285.
- (15) Липинская. Бана и печь. С.242.
- (16) Там же. С. 164.
- (17) Афанасьев А.Н. Религиозно-языческое значение избы славянина // Народ-художник: Миф. Фольклор. Литература. М.: Советская Россия. 1986. С.66. (1851年初出)
- (18) Кручинная Н.А. Русская народная мифологическая проза. СПб.: Наука, 2001. С.108. 「ズレヴリヤネが到着するとオリガは入浴するやうに命じて、「入浴を終えて私のこころへ着なやう。」と云った。彼らは風呂(イストーブカー引用者註)を強く焚き、ドレヴリヤネが入って体を洗い始めると、彼らを風呂に閉じ込めた。」國本哲男、山口巖、中条直樹訳『ロシア原初年代記』一九八七年名古屋大学出版会 六四頁。
- (19) Новосельцев А.П. Восточные источники о восточных славянах и Руси VI-IXвв. // Древнерусское государство и его международное значение М., 1965. С.388-389.
- (20) Раппопорт П.А. Древнерусское жилище. Л.: Наука, 1975. С.27-111.
- (21) Липинская. Бана и печь. С. 249.
- (22) 三浦清美 「中世ロシアの『舵の書』について—ロシアと西欧の法文献の比較研究—」『近世ロシアにおける法文典の史科学的ならびに文献学的研究 平成十六年度—平成十八年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(一))研究成果報告書』二〇〇七年 九頁。

- (23) 國本哲男、山口巖、中条直樹訳『ロシア原初年代記』一九八七年 名古屋大学出版会 一一九—一二二頁。
- (24) Липинская. Бани и печь. С.157-158.
- (25) 同書 一六五頁参照。
- (26) Левкиевская Е.Е. Домовой // Славянские древности. Т.2. М.: Международное отношение, 1999. С.123-124.
- (27) 不浄な霊 不浄な力とはロシアにおける病魔や悪魔、邪霊のことであり、人間に様々な害悪をもたらすとされている。この「不浄」には異教的という意味もあり、キリスト教的な超自然的存在全てを指し示す。
- (28) Черепанова. Мифологические рассказы... С.135.
- (29) Афанасьев А.Н. 1986. С.66.
- (30) Власова. Русские суеверия. С.31.
- (31) 実際のロシア式暖炉の持つ機能は極めて多様である。家を暖めるばかりでなく、食物を調理し、また暖炉の上は暖かな寝床にもなり、衣服、穀物、小魚その他を乾燥するためにも使用される。また、暖炉の下には厳寒期に鶏をいれておく地下室が作られることもある。
- (32) Кенозерские сказки, предания, былички. М.: Институт Наследия. 2003. С.119.
- (33) Власова. Русские суеверия. С.533.
- (34) Левкиевская Е.Е. Домовой. // Славянские древности. Т.2. М.: Международное отношение, 1999. С.120-124.
- (35) Черепанова. Мифологические рассказы... №202.
- (36) Черепанова. Мифологические рассказы... С.150.
- (37) Кручинная Н.А. Легенды, предания, бывальщины. М.: Современник, 1989. С.227-230.
- (38) Власова. Русские суеверия. С.390.
- (39) Липинская. Бани и печь. С.242-243.
- (40) Виноградова Л.Н. Тагань // Славянские древности. Т.1. М.: Международное отношение, 1995. С.482-486.
- (41) Власова. Русские суеверия. С.30.
- (42) Липинская. Бани и печь. С.163.
- (43) Кручинная. Русская народная... С.103.
- (44) 同書 一〇九頁参照。
- (45) Кенозерские сказки... 2003. С.124.

(やまだ・ていや／早稲田大学大学院)